

第13回 日本がん・生殖医療学会 学術集会

P-36

大宮, 2023. 2. 25-26

題名 妊孕性温存目的に凍結された胚や配偶子の利用状況

氏名 井上朋子・森本篤・脇川晃子・姫野隆雄・貫井李沙・北山利江・小宮慎之介・浅井淑子・森本義晴

所属 HORAC グランフロント大阪クリニッ

### 【目的】

近年 AYA 世代のがん患者等に対する妊孕性温存療法が広まっている。この目的で凍結された胚や配偶子が実際にどの程度利用されているのか調査し、今後の課題を明らかにしたい。

### 【対象と方法】

2015 年から 2022 年 11 月までに当院に妊孕性温存治療を希望して来院した患者の経過と凍結検体について診療録を用いて調査した。

### 【結果】

医学的適応の妊孕性温存を念頭に当院へ紹介された患者の総数は、男性 116 名であり、そのうち射出精子または精巣内精子を凍結した症例は 100 名であった。凍結後 2 年以上経った患者は 65 名であり、生殖医療に用いるために凍結精子を融解したのは 6 名（9%）であった。死亡またはその他の理由で廃棄したものを除き現在凍結精子を継続して保存している患者は 48 名（74%）であった。一方紹介された全女性は計 190 名、そのうち胚凍結を実施したのは 47 名、卵子凍結は 70 名、卵巣組織凍結は 4 名、実施しなかった（できなかった）ものは 69 名であった。凍結開始後 2 年以上経った患者数は胚凍結が 28 名、卵子凍結が 43 名であった。温存後の生殖補助医療を実施したのは凍結胚保存 28 名中 15 名（54%）、凍結卵子保存 43 名中 4 名（9%）で両者の間に有意差があった（ $p < 0.01$ 、 $\chi^2$  乗検定）。卵巣組織移植を実施したものはいなかった。2 年以上未使用の胚・卵子・卵巣組織を保存中の患者は 9 名（凍結者の 32%）・34 名（同 79%）・3 名（同 75%）であった

### 【考察】

妊孕性温存治療を実施した場合に、胚に比較して卵子や精子は短期的には利用率が低く、保存期間が長期になる傾向がある。医学的適応による配偶子を凍結・保存する医療機関は、凍結検体の保管場所や管理作業が今後さらに増大することに備える必要があると思われる。